

保育者研修におけるマイクロティーチングの有効性 I

—実施方法についての—考察—

金子 智栄子*

保育士と幼稚園教諭は総称して「保育者」と呼ばれている。

保育者は専門的技術により対人サービスを展開する専門職者として位置づけられ、乳幼児期に生涯発達の基礎を培う重要な職種とされている。しかし、一方では、長時間で休憩が少なく休暇が取れない勤務状況、代替のない人事など、勤務状態の厳しさは従来から問題になっている。保育者の離職率の高さは社会問題となっており、保育者の抱えるストレスを低減すべく援助することが最重要課題と考える。保育者のストレス対処能力として、保育技能と対人能力が挙げられている（水山・丹羽・後藤・鋤柄，1991；嶋崎・森，1995；齋木・上田・中川，2004）。それらを身に付けることが離職率低下に結びつくと考えられている。

保育技能は、特に保育科学生や経験の浅い保育者にとっては身に付けなければならない大切な力量であるが、経験を積んだ現職者にも重要で、この技能を日々精錬することが、さらに洗練された保育技能を生み出すと考えられる。筆者は長年にわたって、保育科学生を対象に保育技能習得におけるマイクロティーチングの有効性を検証してきた（金子，2013）。本研究では現職保育者の研修におけるマイクロティーチングの実施方法を検討する。

Key words：現職保育者，研修，マイクロティーチング

I 保育者の専門性と研修の必要性

乳幼児に対する保育の重要性が明白となり、保育のあり方が注目されている今日、保育者としてふさわしい専門的知識をそなえ、保育技術にもたけた有能な保育者が求められている。2006(平成18)年に教育基本法が改正され、はじめて「第11条(幼児期の教育)」が盛り込まれ、幼児教育の重要性が法律に組み込まれた。このことから、保育者が次世代をになう子どもたちを保育し教育するという重要な立場にあることが、社会的に明確に認められたといっても過言ではない。

1999(平成11)年に改訂された保育所保育指針では、子どもを取り巻く環境の急変に対応すべく、保育所の機能や役割が、通常の保育の充実に加えてさらに一層広がりつつあることが明示された。このような保育ニーズに応えるため、現職保育者が職員研修や自己研鑽などを通して保育や子育て支援の質を常に向上させるよう務めることも、保育所保育指針に示された。いわば、現職保育者の研修の必要性が明記され、保育研究や保育実践を進歩させることの重要性が強調されたのである。さらに、2003(平成15)年11月に保育士資格が法定化され、児童福祉施設の任用資格から名称独

*人間学部児童発達学科

占資格に改められた。保育士の国家資格化から、よりいっそう保育者の専門性の理論的確立が求められる。専門性を備えた保育者の養成が急を要されるようになったのである。また、2008(平成20)年に保育所保育指針が改定され、厚生労働大臣の告示となって法的拘束力をもつようになり、施設長の責務として研修を計画的に実施することが明記された。

幼稚園教諭では、2009(平成21)年4月より、教育免許更新制が導入され、10年ごとに30時間の免許状更新講習が義務づけられるようになった。専門職として、現職保育者の資質や能力の向上が重視されているのである。教育委員会や保育士会なども、従来から、保育研究や公開保育を義務づけて保育者の資質向上を目指している。

Ⅱ 保育者の力量形成とマイクロティーチング

1. 現代保育者に求められている力量

保育者に対する社会的な期待を鑑み、金子(2013)は、保育者の力量研究を精査して、現代的視点から6分類20力量を構成した。態度(①保育への熱意と情熱 ②受容的態度 ③毅然とした態度 ④人権に対する理解と態度)、技能(⑤専門的知識と技術 ⑥計画と環境構成 ⑦遊びと生活への援助 ⑧集団把握とその指導 ⑨得意分野の形成)は「基礎的力量」で、特に養成校段階で習得されるべき力量である。現職段階で「研修により獲得される力量」は、技能向上(⑩反省による保育の模索 ⑪自己研鑽 ⑫要配慮児への対応)、協働的關係(⑬保育者集団の質的向上 ⑭園運営での役割と見通し)、連携(⑮保護者との連携 ⑯地域との連携 ⑰小学校との連携)、視野の拡大と深化(⑱今日的な保育の課題への関心 ⑲他の学問領域への関心 ⑳研究への理解と深化)である。基礎的力量の1つに「技能」があり、特に保育科学生や、経験の浅い保育者にとっては身に付けなければならない大切な力量である。しかし、「技能」は経験を積んだ現職者にも重要で、保育技能を日々精錬することで、より一層高度な「技能」を習得できることになる。「技能向上」は、現職保育者が研修により自己研鑽しなければならぬ重要な力

量でもある。

保育技能の最も効果的な訓練方法に、マイクロティーチングがある。マイクロティーチングとは、時間や内容、人数を縮小して保育するもので、実習教育や現職者研修に有効とされている。

2. マイクロティーチングの有効性

マイクロティーチングの一般的な手順は、訓練生のロールプレイのレッスンをビデオで録画し、指導監督者もそれを観察していて、あとで評価するプロセスをたどる。

筆者は、マイクロティーチングの利点は、次のようなことにあると考える。

1) 本物の保育場面の提供

保育実習では、保育現場で実際の子どもを指導するが、本来は子どもを保育技能の練習に用いることはできない。マイクロティーチングでは本物の保育場面を設定し、実習生や現職保育者が特定の保育技能を獲得できる環境を設定できる。

2) 焦点を当てた保育行動の訓練

「マイクロ」という言葉は、保育に関連する要因の数を最小限にして訓練の焦点を明確にすることを意味している。訓練目標を限定し、訓練する授業の時間も短時間とし、保育を受ける子ども数も5～6名で少人数である。訓練とは直接関係のない要因はできるだけ省略することによって、訓練生と指導者がある特定の保育行動だけに焦点を当てて指導と訓練をすることができるため、保育技能に関する概念と行為が徹底して習得できる。

3) 即時フィードバック

直ちにフィードバックすることによって、訓練の効果を高めることが出来る。そのために、短い保育をした直後に、保育のビデオテープの一部を見ながら指導監督者の批評を受ける。また、その批評を考慮しながら、直ちに指導案を書き直し、再び保育実践と批評のセッションを繰り返す。

保育の対象となる乳幼児は、言語発達が未熟で行動も多様性に富んでいることから、マイクロティーチングを導入して、子どもと保育者との相互交渉を分析することは、子ども理解や指導法の学びに有効と考える。さらに、保育者は子ども集

団を適切に指導して、個々の主体性や自主性が育まれる集団を育てる保育技術を身につける必要がある。筆者は保育技能における集団指導方法の獲得にあたっては、マイクロティーチングは最適と考える。

3. マイクロティーチングの種類

1) 子どもを保育するか否かの区分

マイクロティーチングには、実際に子どもを保育する場合と、子ども役大人を保育する場合がある。筆者は、後者を簡易型マイクロティーチングと呼んで、区別している。本来は子どもを保育する方が現場に近い状態となつて望ましいが、現実的には難しい。そこで大人が子ども役となることがある。いわゆる役割演技であり、模擬保育と言われるものである。模擬保育は漠然となされることが多いと思うが、本書では力量形成などの関連から詳細な分析を行う。さらに、大人が子ども役となる時は、恥ずかしさからふざけて、真剣さに欠けることがあるので気を付ける必要がある。ただし、経験豊かな保育者の場合は、対象児を明確にイメージできることから、リアリティが高い

演技が可能と考える。

2) 事前指導強化型とフィードバック強化型

保育実践の前に詳細で綿密な指導案を作成する場合を「事前指導強化型」、概略的な指導案を作成して保育を実践し、実践後の反省と評価を充実させる場合を「フィードバック強化型」としている。子どもの実態を把握し、保育の流れを理解できる中堅保育者は「事前指導強化型」が、子どもの行動の予想がつきにくい保育科学生や経験の浅い保育者は「フィードバック強化型」の方が効果的であると考えられる。

3) マイクロ・レッスンとマイクロ・クラス

マイクロティーチングには、保育行動の要素を取り出して、焦点づけて実践して、その反省点を生かしてさらに実践を行う「マイクロ・レッスン」と、20分から30分のまとまりのある活動を「ねらい」を立てて、一連の流れ（導入→展開→まとめ）で実践し、評価し反省する「マイクロ・クラス」がある。マイクロ・レッスンの保育行動の要素を、表1に示す。

表1 保育行動の要素

要素	内容
1 動き	保育室内の一か所に立ったままでなく、適度に動き回る。
2 身振り動作	頭や手や体の動きによって、話しことばのコミュニケーションを補う。
3 焦点づけ	特定の行動に子どもの注意を引きつける。
4 相互交渉の様式	保育者対子ども集団、保育者対子ども、子ども対子どもなど、相互交渉のスタイルを変化させる。
5 間（ま）	話題を転換するための合図としたり、子どもの行動を中止して保育者に注目させたりするために、保育者の話の間に適度の間を置く。
6 感覚のチャンネルを変える	教材提示の方法を変えることによって、目から耳へ、耳から目へと感覚受容器官を転換する。
7 構え作り	活動に取りかかる状態にする。
8 枠組み	経験したことを要約したり、既存の知識と新しい知識とを関連づけたりと、認知的な枠組みを形成する。そのため、いま経験したものをそれと類似の例や場面に当てはめたり、新しい場所に応用したりする。
9 沈黙と非言語的手がかり	保育者の不必要なおしゃべりを少なくし、子どもに考える機会を多く与え、もっと参加させるために、沈黙と非言語的手がかりを使う訓練をする。 非言語的手がかりは4つの型に分類できる i. 表情（微笑、しかめ面、厳しい目つき、からかうような目つき） ii. からだの動き（答えている子どもの方を向いたり、動いたり、ポーズをとったり） iii. 頭の動き iv. ジェスチャー（続けなさい、やめなさいなどと身振りで示すような非言語的キュー）
10 強化の技術	子どもを励まして、活動への参加を強める。

4. 保育者養成から現職者に至るまでのマイクロティーチングの活用

筆者は保育者の力量形成を段階的に捉え、養成段階ではマイクロティーチングを行って、保育技能（基礎的力量）を形成することを、現職段階では基礎的力量の精練により保育の模索が高度化し、それが保育者の専門性の向上につながることを示した。そこで、マイクロティーチングを導入して、技能向上の力量形成ばかりでなく基礎的力量を見直して洗練することを提言した（金子、2013）。マイクロティーチングを軸に、養成と研修が結びつく力量形成援助モデルを図1に示す。基礎的力量の技能⑤⑥⑦⑧を駆使して、技能向上⑩⑪⑫がもたらされることを示してある。

1) 保育科学生へのマイクロティーチングの活用

図1より、保育科学生では、実習事前事後指導として実習段階間にマイクロティーチングを組み込み、「見学実習・ビデオ視聴→マイクロ・レッスン→観察参加実習→フィードバック強化型マイクロティーチング→実地指導実習→事前指導強化型マイクロティーチング」と進む。事前指導強化型の方がフィードバック強化型よりも難易度が高いことから、実地指導実習後に設定した。指導方法の授業では簡易型マイクロティーチングを行い、逐次理論と技術の融合を図ることを提言する。マイクロ・レッスンとは個々の要素的な保育行動を訓練する方法である（表1参照）。

保育者養成機関別にマイクロティーチングの活用を検討すると、現在の文部科学省の教育職員免許法において、幼稚園の教員免許状は4年制大学で1種、短期大学では2種が取得できる。4年制大学という2倍の養成期間においては、幼稚園での観察参加とマイクロ・レッスンを繰り返したり、実習成果をマイクロ・クラスで確認したり、幼稚園や保育所に就職の決まった学生に対して応用的な保育技術を身に付けさせたりと、特別支援教育での指導法の検討なども含めて様々な活用が可能となる。また、大学院修士課程においては専修免許が取得できることから、マイクロティーチングにより高度な保育技術を身に付けることも可能である。このような観点から、基礎的力量の形成ばかりでなく、専門性を発展させる技能向上の

力量（⑩⑪⑫）の形成も可能性となると考える。

2) 現職保育者研修でのマイクロティーチングの導入

現職研修でも、保育技術や指導手順の確認を行う。現職保育者の力量レベルによってマイクロティーチングの種類を使い分けることも重要である（図1参照）。

岡田（1982）は事例検討の際にロールプレイを導入すると効果的であるとしている。対象児（特定の子ども集団）への指導方法の確認に簡易型マイクロティーチングは効果的であると考えられる。現職研修のマイクロティーチングは対象児（集団）が特定されているため、個性に合わせた具体的な立案が可能となり、そこが学生を対象に実施するマイクロティーチングとの違いと考える。

秋田（2000）の保育者の発達段階モデルを参考にしてみると、「段階1：実習生・新任の段階」は「現場にて保育はするが、まだ一人前として扱ってもらえない段階」、「段階2：初任の段階」は「理論に基づいて保育できるが、自分の行為の理由や説明ができない段階」、「段階3：洗練された段階」は「保育の専門家としての意識をもち、事実から判断できる段階」、「段階4：複雑な状況に対処できる段階」は「保育のスペシャリストとして自律的に働くことができ、地域連携や園運営にもかかわる段階」、「段階5：影響力のある段階」は「保育実践の創造者となり、他のスタッフの責任も負う段階」と考えられる。

段階1と段階2の現職者は、保育の状況について明確な読み取りができないと考えられるので、指導実践後の反省に重点を置いたフィードバック強化型が望ましい。

段階3の現職者は、保育の経過を予測できることから、指導実践前に綿密な計画を立てて保育状況を予測する事前指導強化型のマイクロティーチングが望ましい。

段階4・5の現職者は、マイクロティーチングを行っての保育実践の模範を示せる立場になれる。さらに段階5の現職者は、管理職として研修を組織する立場になると予想される。マイクロティーチングをビデオに収録して、後日、事例検討の場で討議することも有効と考える。

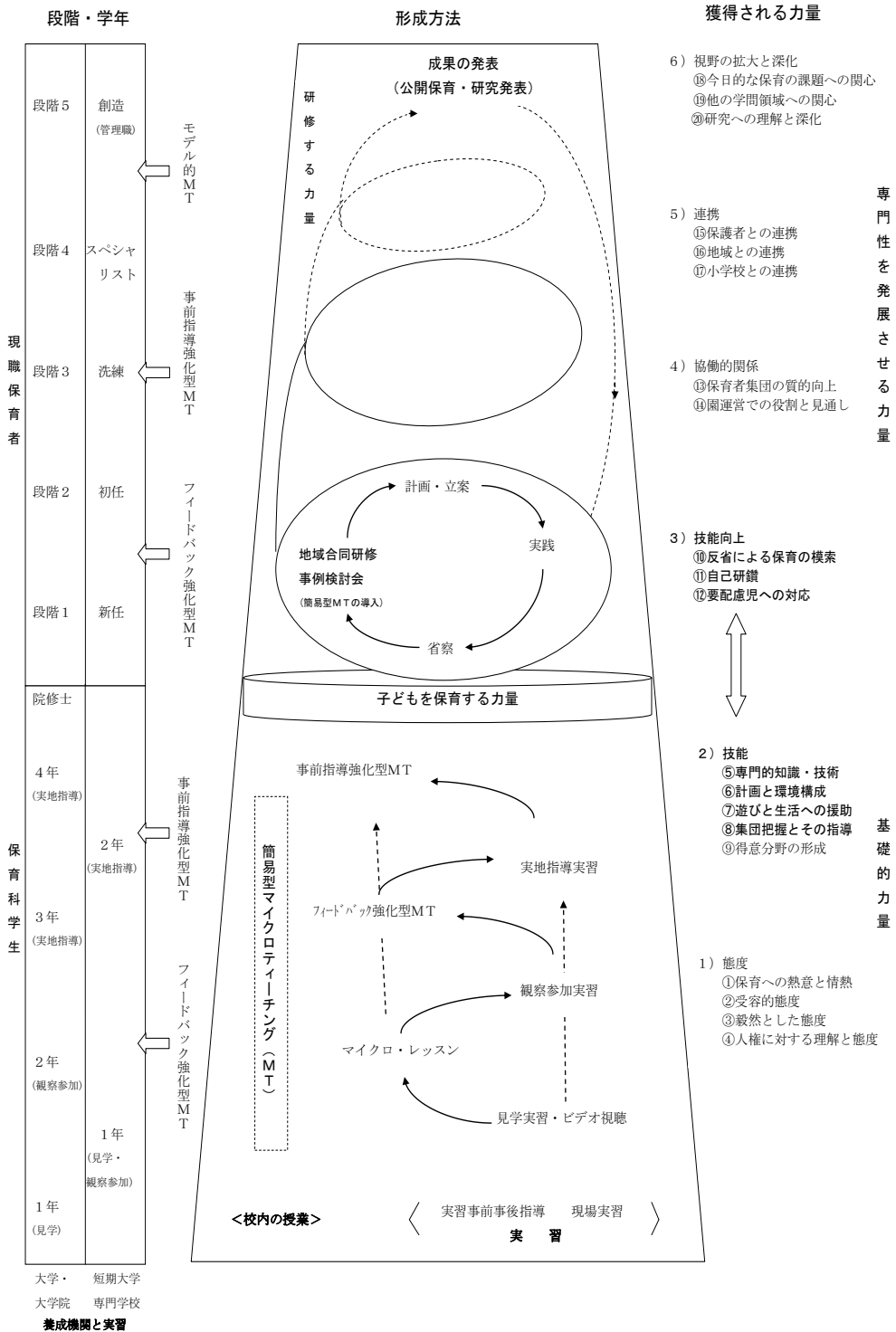


図1 マイクロティーチングによる力量形成モデル

本研究では、第1, 2段階の現職者に対するマイクロティーチングについて実施方法を検討する。

Ⅲ. 保育者研修におけるマイクロティーチングの実践方法

秋田（2000）の保育者の発達段階モデルを参考に、「段階1：実習生・新任の段階」は「現場にて保育はするが、まだ一人前として扱ってもらえない段階」, 「段階2：初任の段階」は「理論に基づいて保育できるが、自分の行為の理由や説明ができない段階」の現職者に対してマイクロ・クラスを実施することを検討する。

1. マイクロティーチングの概要の説明

指導監督者がマイクロティーチング（マイクロ・クラス）の概要を説明し、マイクロティーチングの意義や方法を理解させる。

たとえば、次のような内容である。

- 1) マイクロティーチングは保育技能を向上するため実習教育で、画期的なトレーニング方法であること
- 2) 「マイクロ」とは、短時間に少人数に保育するという意味であること
- 3) マイクロティーチングには「マイクロ・レッスン」と「マイクロ・クラス」があること

- 4) 今回のトレーニングの「マイクロ・クラス」では、主な活動の選定、ねらいの設定、保育実践、評価など、指導案作成から反省・評価をも含む一連の保育を行うこと
- 5) 対象は、実際の子どもの他、大人を子ども役にする場合があること
- 6) 録画や録音により保育を記録して、保育過程を確認しながら省察し、同じ内容を繰り返して保育を改善していくこと

2. 指導計画の作成

子どもの人数（5, 6人を目安）、対象年齢を決めて、20分～30分のまとまった活動を「主な活動」あるいは「テーマ」として選択する。収録する場合は、子どもの活動範囲が狭い活動、たとえば製作などを選択した方がよい。

指導案の形式（表2）は、「環境構成」を主としたものを掲載したが、訓練者が慣れていて書きやすい形式を使用して構わない。訓練者の保育実践の経験が少ない場合には、作成後に、「指導案作成の留意点 チェックリスト」（表3）にてチェックして指導案の記載内容が整っているかを確認する。そして再度、指導案を練り直す。

表2 「環境構成」を主体としたマイクロティーチング指導案

月 日 ()		訓練生 _____	_____ 歳児	場所 _____
主な活動 ねらい				
時間	環境構成	子どもの活動	保護者の援助と配慮	
反省 _____				

表3 指導案作成の留意点 チェックリスト

1. マイクロティーチングのテーマ設定

主な活動：()

2. 指導案について以下の項目を読んでチェック(✓)してみましょう。チェックから外れた項目は、できる限り修正して、より洗練された指導案を作成しましょう。

- ①ねらいは、子どもの「心情・意欲・態度」の視点から記されているか。
- ②ねらいは、5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）を意識して記されているか。
- ③「子どもの活動」は、「ねらい」を達成するためにふさわしい経験になっているか。
- ④「子どもの活動」は具体的に分かりやすく記されているか。
- ⑤時間配分は適切か。
(※例えば、“制作時間が長すぎて作ったもので遊ぶ時間が無くなる”などは良くありません)
- ⑥「子どもの活動」の導入部分は、子どもが興味・関心を持てるように工夫された内容になっているか。
(※例えば、絵本・紙芝居・ペープサート・パネルシアター・手遊び・素話など)
- ⑦「子どもの活動」は、子どもの活動を制限せず、子どもが創意工夫できる柔軟性のあるものとなっているか。
- ⑧「子どもの活動」は、子どもの年齢や発達過程に適した内容となっているか。
(※例えば、“子どもにとって簡単すぎたり難しすぎたりする活動”などは良くありません)
- ⑨環境構成には、使用する材料や道具の名前、必要な数量、活動における具体的な準備
(※例えば、“どんぐりを煮沸する”，“1週間前にかえるを捕まえてクラスで飼う”，“アジサイを窓際に飾っておく”，“子どもの前でする話の内容”など)について記しているか。
- ⑩環境構成の構成図には、全体の位置関係や方向が分かるような目印となるものを描いているか。
- ⑪環境構成は、時間経過や活動内容によって変化するか。
(※例えば，“子どもが制作を発表する舞台を用意する”，“環境が室内から園庭に移る”など)
- ⑫「保育者の援助と配慮」には、子どもの健康や安全に充分配慮した内容が記されているか。
- ⑬「保育者の援助と配慮」には、あらゆる子どもの姿を想定して多様な視点から記されているか。
(※例えば，“飽きた子や早く終えた子に対して具体的にどのような援助をするか”など)
- ⑭「保育者の援助と配慮」には、それを行う理由や意図についても記されているか
(※例えば，“子どもが自ら進んで片付けができるように” “今〇〇時だよ”と声を掛け、片付けに自然と意識が向くように促す”など)
- ⑮「ねらい」「子どもの活動」は子どもが主語に、「環境の構成」「保育者の援助と配慮」は教師が主語になっているか。
- ⑯図絵を挿入する・小見出しをつける・行を揃えて書く・環境構成図に定規を使うなど、誰もが読みやすいように丁寧に記されているか。
- ⑰指導案には、“保育者としての願い”が込められているか。
(※例えば，“私が大好きだから子どもにも経験して欲しい”など、自分なりの想いや願い)

表4 指導監督者用マイクロティーチングでの行動評定

下記に保育者や子どもの行動が具体的に記載されています。マイクロ実践の1回目と2回目に分けて、該当する項目に「レ」を付けてください。

I. 保育者に対する行動評定

1回目 2回目 <保育技術・態度>

- ①保育内容の理解度：活動内容とねらいを十分把握して指導にあたっていた。
- ②保育内容の充実度：導入・展開・まとめといった段階にそって保育内容を充実させていた。
- ③手順：子ども（集団）が混乱せずに次の活動に移行できるような手順をとっていた。
- ④予想外の子どもの行動への対応：予想外の幼児の行動に適切に対応していた。
- ⑤余裕：子ども（集団）の行動を予測したりするような余裕があった。
- ⑥言葉かけ：子どもが理解しやすいような言葉かけを工夫していた。
- ⑦指導の修正：指導に手違いが生じたとき、すぐに修正できた。
- ⑧個別指導：集団の活動経過に考慮しながら、個別指導を行えた。
- ⑨不参加児などへの対応：落ち着かず活動をやらない子どもなどを、無理なく活動に引き込んでいた。
- ⑩間の活用：「間」を活用していた。
- ⑪注意の集中：幼児（集団）の注意をよくひきつけていた。
- ⑫タイミング：具体物の提示や言葉かけなどのタイミングが良かった。
- ⑬発言の取り上げ方：子どもの発言を不満が生じないように適切に取り上げていた。
- ⑭正の強化の利用：誉めることを適切に活用していた。
- ⑮負の強化の利用：禁止・叱責・無視などを適切に活用していた。
- ⑯発想の取り上げ方：子どもの発想を取り上げて、それを援助することができた。
- ⑰主体的活動の尊重：指導が押しつけとなっておらず、子どもの主体性が尊重されていた。
- ⑱幼児心理の理解度：子どもの心理状態をくみとって指導を行っていた。
- ⑲指導態度：子どもに明るく、やさしく、さわやかに接することができた。

1回目 2回目 <環境配置>

- ⑳子ども集団の位置：子どもたちの位置や間隔は適切だった。
- ㉑指導者の位置：指導者の位置は適切だった。
- ㉒人的環境の配置：保育に支障がないように、指導者・子どもたち・観察者が配置されていた。
- ㉓環境設定：指導場所の特徴を生かして環境を設定していた。
- ㉔教材・教具の準備：教材・教具などの準備は十分行われていた。

II. 子どもに対する行動評定

1回目 2回目

- ①遊戯性：活動内容を楽しんでいた。
- ②自由度：のびのびと活動していた。
- ③主体性：自主的・主体的に活動に参加していた。
- ④発展性：課題を自分なりに発展させていた。
- ⑤満足度：この活動に満足していたようだった。
- ⑥持続性：実地指導終了後、この活動と関連のある活動を行うと思う。

3. 保育実践

マイクロ・クラスの一般的な手順は、訓練者のロールプレイのレッスンをビデオテープレコーダーで録画し、指導者もそれを観察していて、あとで評価するプロセスをたどる。20～30分ほどのひとまとまりの保育を行い、目標設定から評価に至る、保育のすべての面を訓練する。保育者役が詳細な指導案を作成し、子ども（役）を対象に保育し、それをVTRに録画して、討議する。その後、反省を生かしてもう一度同じ内容で保育を実践する。

- 1) 参加者：保育者役（状況によっては補助の保育者を追加して構わない）、
子ども役5～6名、指導監督者

2) プログラム

(1) 1回目マイクロティーチング

①保育実践（20分～30分間）

指導監督者にはチェックリスト（表4）にて保育者役・子ども役の行動評定

②討議（30分間程度）

保育者役→子ども役→指導監督者の順にコメント

必要に応じて録画・録音を再生して確認し、保育者役は反省点を明確にする

(2) 2回目マイクロティーチング

①保育実践（20分～30分間）

指導監督者にはチェックリスト（表4）にて保育者役・子ども役の行動評定

②討議（30分間程度）

保育者役→子ども役→指導監督者の順にコメント

必要に応じて録画・録音再生して確認、保育者役は反省点を明確にする

3) アンケートの記入

マイクロティーチングの有効性（表7）、力量形成（表8）とそのプロフィール（表9）に回答して研修成果を確認する。

指導監督者は、保育者役の保育技術や、子ども（役）の行動を表4のチェックリストで評定して助言に役立てる。保育実践を収録した方が、確認しやすいので省察の際に効果的であるが、録音のみでも実践状況がくみ取りやすい。指導計画を修

正して、同じ内容で保育実践を行う。この一連の流れを繰り返すが、繰り返しの回数は、訓練者と指導者で状況に合わせて決めて構わない。

保育実践の収録を文字化すると、保育者と子ども（役）の相互交渉がより客観的に省察できる。

4. マイクロティーチングの効果測定

1) 保育実践に対する分析

(1) 行動評定による分析

指導監督者が、保育者役や子ども（役）の行動を評定して、アドバイスに用いる。行動チェックリスト（表4）を参考にされたい。

(2) 逐語記録を用いた分析

発話のターム分類により、頻度や相互作用について分析する。例えば、保育実践の1回目と2回目の分類での頻度の比較、「対応（言葉がけなど）→子どもの応答」の相違、個々の特徴のある子どもへの働きかけなど、を検討する。

表5は、保育者役の働きかけの種類と、それに対する子ども（役）の応答が示されている。表6は子ども（役）の働きかけと、それに対する保育者（役）の応答が示されている。

例えば、表5において1回目と2回目の保育実践を比較して、保育者から子どもへの「T1：賞賛・励まし・支持・共感」が増えて「T5：命令・禁止」が減り、子どもの「TC3：受容」が増えているならば、保育は好ましい展開をするようになったと考えられる。

2) マイクロティーチングの有効性の確認

保育者役は、表7「マイクロティーチング有効性測定尺度」、表8「保育者の力量形成尺度」に回答して、さらに表9「保育者の力量形成プロフィール」を作成して、どのような学びがあったかを確認する。そして＜自分の学びについて＞の欄に記入して研修成果をまとめる。子ども役も同様に記入して、保育を受ける立場としての学びを確認する。また、見学者（観察者）がいた場合は、モデリング効果が予想されることから、同様に記入して気づきを確認する。

表5 保育者（T）→子ども（C）の分析カテゴリに関するコーディングスキーマ

保育者の発話カテゴリ 1	T1 賞賛・励まし・支持・共感 (例) お, かつこいい, 拍手いっぱいもらえちゃったね.
	T2 示唆・助言 (例) こんな風に今日みたいに, 丸になっていくよ.
	T3 承認・許可 (例) 立—ちましようでいいよ, 立—ちましょ.
	T4 中間的発言 (説明・指示・確認・発問) (例) それでは星組さん, 朝の集まりをします.
	T5 命令・禁止 (例) そうだね, しーだね.
	T6 注意・叱責・非難 (例) かなたくん, 今日これおしまい.
保育者の発話カテゴリ 2	open(対象者・内容) な発話 クラス全体に向けた発言または幼児の多様な答えや行動を引き出す発言 (例) あ, 良いお返事聞こえた! それでは立—ちましよう!
	end(対象者・内容) な発話 特定の幼児に向けた発言または幼児の決まった答えや行動を求める発言 (例) りかおくん, 今かなたくんのお返事の時間だよ.
幼児の反応	TC1 無反応
	TC2 拒否
	TC3 受容

表6 子ども（C）→保育者（T）の分析カテゴリに関するコーディングスキーマ

幼児の発話カテゴリ	C1 賞賛・励まし・支持・共感 (例) うん, 狭かった.
	C2(クラス全体に向けた) 示唆・助言 (例) 「手に粉をつけたらいいよ,」
	C3 自律的な援助要請 (例) 「もっと大きいスコップを出して」
	C4 中間的発言 (説明・意見・確認) (例) は—い, や—った.
	C5(自分ごとに関する) 承認・許可 (例) 「先生お茶飲んでもいい?」 ²
	C6(自分ごとに関する) 訴え・依頼 (例) 青が欲しい, 痛い.
	C7 依存・甘え・自己顕示的行動 (例) この間ね, パパと一緒に動物園に行ったらぞうさんがいたの!
保育者の反応	CT1 無反応
	CT2 拒否
	CT3 受容

表7 マイクロティーチング有効性測定尺度

マイクロティーチングを通して、自分自身にどのような効果がありましたか？

次の項目を読んで「4.あてはまる」「3.少しあてはまる」「2.あまりあてはまらない」「1.あてはまらない」のうち、いずれか1つを選んで、その番号を○で囲んでください。

(4.あてはまる, 3.少しあてはまる, 2.あまりあてはまらない, 1.あてはまらない)

保育技術

- ①保育技術：発言の取り上げ方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(実地指導における子どもの発言のとりあげ方を学んだ)
- ②保育技術：負の強化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(実地指導における禁止・叱責・無視などの活用の仕方を学んだ)
- ③保育技術：正の強化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(実地指導におけるほめ方の活用の仕方がわかった)
- ④指導の流れへの理解：「活動」間の連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(子ども(集団)が混乱せずに次の活動に移行するような指導を計画する方法を学んだ)
- ⑤保育技術：注意の集中・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(実地指導における子ども(集団)の注意の引き付け方を学んだ)
- ⑥不参加児などへの対処・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(着かず活動をやらない子どもなどを、無理なく活動に引き込む方法を学んだ)
- ⑦ポイントの置き方：活動の盛り上がり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(子どもの活動が高まるような指導過程を考えて立案することを理解できた)

学習状態の認識

- ⑧学習状態のメタ認知：保育者の資質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(保育者として、自分のよいところ、改めなければならないところがわかった)
- ⑨学習状態のメタ認知：保育技術・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(子どもを指導する上で、自分はどのような保育技術を身につけなければならないかわかった)
- ⑩学習状態のメタ認知：学習知識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(子どもを指導する上で、自分にはどのような学習知識が不足しているかわかった)

学習意欲

- ⑪学習意欲：自己学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(マイクロティーチングをして、自分から進んで学習しようと思った)
- ⑫学習意欲：講義(講演)聴講への意欲・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(マイクロティーチングをして、講義(講演)をしっかりと聴こうと思った)
- ⑬自己課題の発見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(保育者として、今後の自分自身の学習課題を見出すことができた)

指導の難しさ

- ⑭立案の難しさの自覚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(1つ1つの子どもの活動についても、その過程を考えながら深く意味を追求して書くといった立案の難しさを理解した)
- ⑮実地指導の難しさの自覚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(実際に子ども(集団)を指導することは難しいと実感した)

幼児理解

- ⑯個人差の理解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(年齢が同じでも個人差が相当あることを実感した)
- ⑰幼児の発想の豊かさ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(子どもの発達の豊かさに気付いた)
- ⑱年齢別活動内容の理解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(年齢別の「経験と活動」の内容の違いがわかった)

指導案の書き方

- ⑲形式に沿った書き方の理解：各欄の関連性・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(指導案の「環境構成」「子どもの活動」「保育者の援助と配慮」などの各々の欄を関連させて記入する方法が理解できた)
- ⑳形式に沿った書き方の理解：書式・・・・・・・・・・・・・・・・ 4-3-2-1
(指導案の「環境構成」「子どもの活動」「保育者の援助と配慮」などの各々の欄を区別して書く方法が理解できた)

表 8 保育者の力量形成尺度

マイクロティーチングで身についた程度について、「4.身についた」「3.少し身についた」「2.あまり身につかなかった」「1.身につかなかった」のうち、いずれか1つを選んで、その番号を○で囲んで下さい。そして表9でプロフィールを作成して、形成された力量を確認してください。

< 1. 保育者としての基礎的力量 >

1) 態度

- ①保育への熱意と情熱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(保育に対して熱意や積極性をもつ)
- ②受容的態度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(子どもの行動を受容し認める態度をもつ)
- ③毅然とした態度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(子どもの行動に対して、必要に応じて毅然とした態度をとる)
- ④人権に対する理解と態度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1

2) 技能

- ⑤専門的知識と技術・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(発達や保育内容に関する専門的知識・技術をもつ)
- ⑥計画と環境構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(子ども理解を基盤に保育の計画を立て、環境構成、援助の在り方を構想する)
- ⑦遊びと生活への援助・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(子どもを適切に理解し、遊び・生活への援助を行う)
- ⑧集団把握とその指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(子どもの集団を把握し、まとめる)
- ⑨得意分野の形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1

< 2. 保育者の専門性を発展させる力量 >

3) 技能向上

- ⑩反省による保育の模索・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(保育を振り返り、反省によって、新たな保育を模索する)
- ⑪自己研鑽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(研修・研究を行い、たえず自己研鑽に励む)
- ⑫要配慮児への対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(特別な教育的配慮を要する子どもへの理解と対応)

4) 協働的關係

- ⑬保育者集団の質的向上・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(同僚と協力しながら、保育者集団の質を高める)
- ⑭園運営での役割と見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(園運営において自分の役割を考えて行動し、全体を見通して運営を支える)

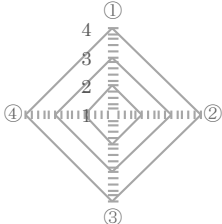
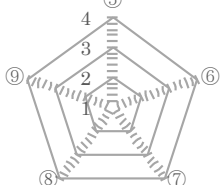
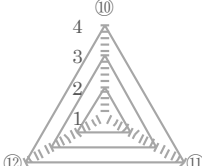
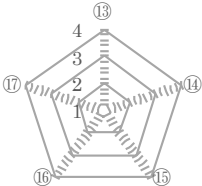
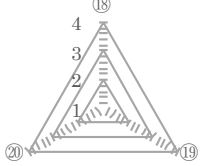
5) 連携

- ⑮保護者との連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(保護者との連携をとりながら、子どもを育てる)
- ⑯地域との連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(地域との連携をとりながら、子どもを育てる)
- ⑰小学校との連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(小学校との連携をとりながら、子どもを育てる)

6) 視野の拡大と深化

- ⑱今日的な保育の課題への関心・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(今日的な保育の課題に関心をもち、探求する)
- ⑲他の学問領域への関心・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(他の学問に関心をもつ)
- ⑳研究への理解と深化・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 - 3 - 2 - 1
(研究の視野を広げながら研究を深める)

表9 保育者の力量形成プロフィール

分類	ストレス 対処	力量診断	自分の特徴と 今後の努力方針
基礎的力量 (主に保育科学生対象)	保育技術能力関連	態度 (①保育への熱意と情熱, ②受容的態度, ③毅然とした態度, ④人権に対する理解と態度) 	
		技能 (⑤専門的知識と技術, ⑥計画と環境構成, ⑦遊びと生活への援助, ⑧集団把握とその指導, ⑨得意分野の形成) 	
専門性を発展させる力量 (主に現職者対象)		技能向上 (⑩反省による保育の模索, ⑪自己研鑽, ⑫要配慮児への対応) 	
	対人関係能力関連	協働と連携 (⑬保育者集団の質的向上, ⑭園運営での役割と見通し, ⑮保護者との連携, ⑯地域との連携, ⑰小学校との連携) 	
	研究・研修の原動力	視野の拡大と深化 (⑱今日的な保育の課題への関心, ⑲他の学問領域への関心, ⑳研究への理解と深化) 	
力量形成のまとめ 今後の課題		(今後はどの種類の力量を伸ばしていきたいか?)	(どのような力量が形成されたか?)

3) 追跡アンケート

1ヶ月くらい過ぎてから、マイクロティーチングの研究効果を確認する。

- (1) 指導監督者用：研修者各自について、マイクロティーチングによる影響性を記入
認識面と行動面で（あり・なし）のいずれかを選択して、「あり」の場合は具体的に記述する
- (2) 研修者用：マイクロティーチングによる研修後の影響と考えられる変化について、
認識面と行動面で（あり・なし）のいずれかを選択して、「あり」の場合は具体的に記述する

V まとめと応用

筆者は、長年、保育者養成におけるマイクロティーチングの有効性を検証してきた。

そこで、本研究では現職保育者を対象に、研修にマイクロティーチングを導入する方法を検討した。「図1 マイクロティーチングによる力量形成モデル」における現職保育者研修での保育経験の乏しい保育者（初任・新任段階）を対象に、フィードバック強化型のマイクロティーチングの実施方法を提案した。

指導案作成に際しては、「表3 指導案作成の留意点 チェックリスト」を用いて指導案を完成する。子ども役(5, 6人)を対象にした保育実践(20分～30分)を録画し、指導監督者の助言による省察に役立て、さらに修正し保育実践を繰り返すという流れである。保育実践では、指導監督者が、「表4 指導監督者用マイクロティーチングでの行動評定」に回答する。さらに逐語記録により「表5 保育者(T)→子ども(C)の分析カテゴリに関するコーディングスキーマ」「表6 子ども(C)→保育者(T)の分析カテゴリに関するコーディングスキーマ」を用いた行動分析を提案した。なお、参加者全員が「表7 マイクロティーチング有効性測定尺度」「表8 保育者の力量形成尺度」「表9 保育者の力量形成プロフィール」に回答して学びの確認を行い、研修成果の可視化を明確にした。さらに、追跡アンケートを行って研

修成果の定着も把握できるようにした。

現在、園内研修で実施しており、逐次成果を発表していきたいと考えている。

筆者は保育者の力量研究において、現職段階で「研修により獲得される力量」は、技能向上(⑩反省による保育の模索 ⑪自己研鑽 ⑫要配慮児への対応)、協働的關係(⑬保育者集団の質的向上 ⑭園運営での役割と見通し)、連携(⑮保護者との連携 ⑯地域との連携 ⑰小学校との連携)、視野の拡大と深化(⑱今日的な保育の課題への関心 ⑲他の学問領域への関心 ⑳研究への理解と深化)としている。技能向上はマイクロティーチングによって獲得されやすい力量と考える。そこで、保育者研修におけるマイクロティーチングの応用として、「協働的關係」や「連携」の力量形成を提案する。

- 1) 協働的關係の力量(⑬保育者集団の質的向上 ⑭園運営での役割と見通し)の形成

簡易型マイクロティーチングの模擬保育を役割演技と考えると、保育者が園長職や主任となる擬似的な体験は、園運営を理解させると考える。保育者が管理職や経営者の立場を理解することで、職場での相互理解が進み、力量⑭のみならず⑬も向上していくと予想できる。

- 2) 連携の力量(⑮保護者との連携 ⑯地域との連携 ⑰小学校との連携)の形成

現在、保護者対応の難しさが問題にされ、保護者との意思疎通をいかに図るかだけでなく、状況によっては虐待予防を行う必要もある。保育者が保護者役となって親と面談する場面を模擬体験することで、難しい親への対応を訓練することができる。また小学校教諭の職種への理解も重要であり、保育者が小学校教諭役になって模擬的に授業を行う、あるいは保育者が小学生役となって授業を受ける体験することで、小学校入学までに幼児に何を身につけさせたいかある程度把握できると考える。このような場合は、簡易型マイクロティーチングの活用が有効と考える。

引用文献

秋田喜代美(2000). 保育者のライフステージと危機 発達 83,50.

- 金子智栄子 (2013). 保育者の力量形成に関する実践的研究: 有効な保育者養成と現職研修のあり方を求めて, 風間書房.
- 厚生労働省 (1999). 平成 11 年改訂 保育所保育指針.
- 厚生労働省 (2008). 平成 20 年改定 保育所保育指針.
- 水山進吾・丹羽孝・後藤宗理・鋤柄増根 (1991). 保育所保育者の意識に関する研究—悩みに関する尺度の平均値と自由既述回答にもとづく分析, 保育養成研究年報, 9, 87-101.
- 岡田正章 (1982). 保育者の研修をめぐって (総説) 保育学年報 1982 年版, 10-17.
- 齋木久子・上田哲世・中川香子 (2004). 保育者が「問題と感じていること」について—保育経験, 保育所と幼稚園による差異, 1980 年代調査との比較—保育士養成研究, 22, 1-10.
- 嶋崎博嗣・森昭三 (1995). 保育者の精神健康に影響を及ぼす心理社会的要因に関する実証的研究 保育学研究, 33(2), 35-44.

(2018.9.24 受稿, 2018.11.5 受理)

